

令和三年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十三ページである。脱落している場合はただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は、現代世界ではグローバリズムの生み出す秩序が帝国のように国民国家に力を及ぼし、その結果として生権力と規律訓練とが並存していることについて論じています。これを読んで後の問いに答えなさい。

規律訓練と生権力は、フランス系現代思想で使われる権力の二類型である。おおざっぱに説明すれば、規律訓練のほうは、権力者があしろうこうしろと命令し、懲罰を与えることで対象者を動かす権力を指す言葉である。懲罰があるので規律訓練と呼ばれる。他方で生権力のほうは、あくまでも対象者の自由意志を尊重しながらも、規則を変えたり価格を変えたり環境を変えたりすることで、結果的に権力者の目的どおりに対象者を動かす権力を指す言葉である。対象者の社会的な生活に介入するという意味で生権力と呼ばれる。

この両概念の歴史は複雑で、一般にはともにフーコーが発明したと考えられているが、実際には彼は両者をこのように対立させてはいない。そもそも規律訓練は一九七五年の『監獄の誕生』で、生権力は一九七六年の『知への意志』で現れる言葉で、このふたつの本は異なつた現象を分析している。けれども、のちに、フーコーの友人でもあつた哲学者のジル・ドゥルーズが、一九九〇年に発表した短い評論で両者を対立させ、規律訓練が支配する「規律社会」は一九世紀までの社会のモデルであり、現代社会は生権力が支配する「管理社会」に移行しつつあるという簡単な図式を提示してみせた。規律から管理へというこの図式は、フーコーのもともとの主張に比べてたいへんわかりやすかつたので、すぐに広く知られるようになった。

しかし、その議論はどれほど適切だろうか。ぼくには、そこで立論の前提となつた権力形態の移行という想定そのものが疑わしいように思われる。

なぜか。それは、規律と管理というふたつの権力形態は、ほんとうはたがいに排他的ではないはずだからである。規律と管理は同時に作動しうる。権力者あるいは管理者は、ひとつの目的を実現するため複数の手段を用いることができる。たとえば、公園からホームレスを追出したいのであれば、直接にホームレスに出て行けと命令することもできれば、ベンチや歩道の設計を変え、あるいは近くに宿舍を用意し、ホームレスが「自発的に」公園を離れるよう仕向けることもできる。

ドウルーズが管理社会の例として提示したのは、「決められた障壁を解除するエレクトロニクスのカードによって、各人が自分のマンションを離れ、自分の住んでいる通りや街区を離れることができるような」「しかし決まった日や決まった時間帯には、同じカードが拒絶されることもある」町である。しかし、そのようなカードを与えられたからといって、規律訓練的な命令や監視がなくなるわけではない。ぼくはたまたまいまこの原稿をホテルで書いているが、最近の少なからぬホテルは、まさにドウルーズが想像したようなカードで入室や階の移動を管理している。チェックアウトのあとは、同じカードを使って同じ部屋には入れないし、エレベーターのボタンすら押せない。しかし、だからといってフロントからスタッフがいないくなるわけではないし、各種警告の掲示がなくなるわけでもない。カードの存在は、むしろ、そのような命令と監視が行き届かない場合（顧客と言葉が通じない場合など）の保険として機能している。^(a)だとすれば、ぼくたちは、現代世界では規律社会と管理社会は重なっているのだと、したがって国民国家と帝国も重なっているのだと言うべきではなからうか？

あるいはこのように表現してもよいかもしれない。ぼくは、ナショナリズムを人間に、グローバリズムを動物に割り当てた。国民国家（ネーション）は人間を人間として扱う体制である。むしろ、国民国家こそが人間を（規律訓練の徹底によって）人間にするのである。それがヘーゲル^{*}が述べたことである。

では帝国はどうだろうか。人間と動物の対比にしたがうならば、帝国はまさに人間を動物のように扱う体制だと言うことができる。帝国は個人になにも呼びかけない。ただ消費者であることしか求めない。そこでは個人は、地球規模の世界市場で集められた、ビッグデータのひとつのエントリ^{(1)*}でしかない。

ただし、これはけつして、人道主義的で左翼的な非難、すなわち「帝国は人間を人間扱いしていない！」といった類の告発につながらない。さきほども述べたように、生権力はそもそも『知への意志』で導入された概念である。この著作でフーコーが明らかにしたのは、一九世紀のドイツやフランスにおいて、公衆衛生の重要性が発見され、統計学が整い、労働者の住環境が改善され福利厚生が図られるその歩みが、そのまま国家権力（生権力）の拡大に結びつく光景だった。一九世紀の国民国家は、厳しい競争のなか、生産力を上げるために労働者の人口を計画的に増やす必要に迫られていた。公衆衛生の理念はその配

慮から誕生している。むしろ、公衆衛生の理念は労働者の生活の質をまचाがいなく上げたにちがいない。しかしそれは、起源としては、農場の生産性を上げるため、牛馬の衛生管理を徹底するのと同じ発想による配慮だったのである。だから公衆衛生の対象となる労働者には顔がない。名前もない。それは何十万、何百万というデータのひとつのサンプルでしかなく、また実際にそのような規模で分析しなければ公衆衛生は実現できない。だからそれは統計学の進歩と密接に結びついている。生権力はこの点で、本質的に人間を動物のように管理する権力である。実際、カードキーやGPSのようなドウルーズが例示に用いた管理社会の技術は、ほとんどが最初は家畜に用いられたものではなからうか？

そして、人間が人間として扱われることと人間が動物として扱われること、この両者もまたけっして排他的ではない。同じ個人が、個別のコミュニケーションの場では人間として（意志を持った顔のある存在として）扱われるとともに、同時に統計の対象としては動物のように（匿名のひとつのサンプルとして）扱われるということは十分にありうる。というより、現代社会はむしろそのような例に満ちている。

たとえば少子化問題を考えてみよう。ぼくたちの社会は、女性ひとりひとりを顔のある固有の存在として扱うかぎり、つまり人間として扱うかぎり、けっして「子どもを産め」とは命じることができない。それは倫理に反している。しかし他方で、女性の全体を顔のない群れとして、すなわち動物として分析するかぎりにおいて、ある数の女性は子どもを産むべきであり、そのためには経済的あるいは技術的なこれこれの環境が必要だと言うことができる。こちらは倫理に反していない。そしてこのふたつの道徳判断は、現代社会では（奇妙なこと！）矛盾しないものと考えられている。^(c)その合意そのものが、ぼくたちの社会が、規律訓練の審級と生権力の審級をばらばらに動かしていることを証拠だてている。国民国家は出産を奨励できないが、帝国は奨励できる。それが現代の出産の倫理である。

ぼくたちは、人間であるとともに動物としても生きている。顔のある個人であるとともに匿名の群れのひとりとしても生きている。人間はそもそもだれもがそのような両義的な存在なのであり、ここまで見てきた世界の二層構造は、いわばその両義性から必然的に導かれている。

（東浩紀『観光客の哲学』による）

*ヘーゲル——一九世紀初めのドイツ連邦形成期に活躍した哲学者。

*エントリー——入力データ。

*審級——本来は裁判用語であるが、ここでは判断基準と同様の意味。

問一 傍線部(1)の「エントリーでしかない」や傍線部(2)の「サンプルでしかなく」とはどういうことか、説明しなさい。

問二 傍線部(3)について、ホテルの事例から規律社会と管理社会が重なっていると推論できるのはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部(4)について、「帝国は人間を人間扱いしていない」という「告発につながる」のはなぜか、説明しなさい。

問四 傍線部(5)は、どのようなことをいっているのか、説明しなさい。

II

次の文章は、林京子の小説「トリニティからトリニティへ」の一部です。一九九九年秋、「私」は世界ではじめて原子爆弾の爆発実験が行われたアメリカ合衆国ニューメキシコ州の「トリニティ・サイト」と呼ばれる地を訪れる。以下はその時のことを述べたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

フェンスの内の広さは、野球場が六つも七つも入る、原っぱだった。囲いの外の地域も含めて、辺りはミサイル実験場なのだろう。観光写真に載っているホワイトサンドと、ミサイル実験場になっているホワイトサンドが、同じ地点とは思われないが、「今日までに四万二千発のミサイルが発射されている」という。射撃場のどこかに射撃物が埋まっている可能性があるの
で、よく注意すること、またこれは常識である」と注意書きがあった。『トリニティ・サイト一九四五―一九九五年』という小冊子には「フェンス内の放射能レベルは低く、一時間のツアーで〇・五から一ミリレントゲンを浴びる計算になる。アメリカ人の大人は毎年一年間に、平均九十ミリレントゲンの放射線を浴びている。例えばエネルギー省の発表によると三十五〜五十ミリレントゲンを太陽から、三十五〜三十五を食物からとっている。見学を決めるのはあなたであると危険性は十分に説明されていた。

フェンスのなかに一時間とどまると、〇・五ミリから一ミリレントゲンの放射線が、人体に加算されるのである。アメリカ人の大人が、年間に浴びる放射線が九十ミリレントゲンとあるから、「トリニティ・サイト」で浴びる放射線は、決して低いとはいえない。

私たちは車から降りると、許可されたミネラルウォーターのボトルをもって、フェンスの内へ歩いていった。見学者は二百人ばかりである。家族連れが多く、子供の手を引いた父親の姿が目につく。砂漠の植物のトゲと、放射能をもつ短かい足許の草に気をとられているからだろうか。見学者たちはうつ向いて、無言で歩いていく。荒野のなかで動いているのは、「トリニティ・サイト」を歩く人間だけである。樹木がない荒野では、小鳥も巣が造れないのだろう。

私は、鳴りを静めた荒野に耳を澄ました。陽にあたためられてはげる草の葉の、小さいが力強い音が聞きたかった。蟻地獄を滑り落ちていく虫がたてる、あがきの砂の音でもよかった。生きていくものがたてる物音を、私は聞きたかったのである。

私は「グランド・ゼロ」へ向かつて歩いていった。石の碑を取り巻く見学者の、輪の外まで歩いて、私は立ち止まった。顔をあげて四方をみた。一望千里、身の隠し処のない曠野である。地面より高いのは人間と、「トリニティ・サイト」を囲むフェンス、遠くの地平線に連なる赤い山肌。その中心点、私の目の前に立つ「グランド・ゼロ」の記念碑だけである。

五十余年前の七月、原子爆弾の閃光はこの一点から、曠野の四方へ走ったのである。実験の日は朝から、ニューメキシコには珍しい大雨が降っていたという。実験は豪雨のなかをついて、行われた。閃光は降りしきる雨を煮えたぎらせ、白く泡立ちながら荒野を走り、無防備に立つ山肌を焼き、空に舞い上ったのである。その後の静寂。攻撃の姿勢をとる間もなく沈黙を強いられた、荒野のものたち。

大地の底から、赤い山肌をさらした遠い山脈から、褐色の荒野から、^②ひたひたと無音の波が寄せてきて、私は身を縮めた。どんなにか熱かっただろう――。

「トリニティ・サイト」に立つこの時まで、私は、地上で最初に核の被害を受けたのは、私たち人間だと思っていた。そうではなかった。被爆者の先輩が、ここにいた。泣くことも叫ぶこともできないで、ここにいた。

私の目に涙があふれた。

係官の誘導に従ってフェンスのなかの細い道を歩き出したときから、あれほど自覚的だった被爆者意識が、私の脳裏から消えていた。「グランド・ゼロ」に向かう私は、被爆する以前の、十四歳の少女に還っていたようだった。八月九日を休戦する前の「時」に戻って、「グランド・ゼロ」という未知なる地点へ、歩き出していたのかもしれない。記念碑の前に立ったときに私は、真正正銘の被爆をした。

思い返してみると、八月九日に私は一滴の涙も流していない。手や足や、顔の形をとどめない人の群に混って逃げながら、涙は流さなかった。真夏の道の蟻のように、浦上の焼け野原に一筋の列ができていた。治療を受けるために集まった、まだ歩ける人の列だった。列と向きあつて、一人の医師が手当てをしていた。割れた敷石に腰かけた医師も、頭に包帯を巻いていた。ガレキになった長崎の街は海まで見渡せて、地面より高いものは、ここにも人間しかいなかった。私は、光のなかに浮き出た光景をみながら、ひたすら逃げた。

三日後に、疎開地から七里の道を歩いて母が私を探しにきた。途中で、浦上の救援に向かう学生たちに母は私の職場を告げて、細い骨があつたら娘のですから拾つてきてください、と頼んだ。

私が無事であるのを知ると、生きてたのね、といつて母は胸に抱きしめて泣いた。それでも私は涙を流さなかつた。⁽³⁾八月九日に流さなかつた涙を、私は人としてはじめて流したのかもしれない。もの言わぬ大地に立つたとき私は、大地の痛みに震えた。今日まで生きてきた日日も、身心に刺さる非情な痛みだつた。しかしそれは、九日から派生した表皮の痛みだつたのかもしれない。私は、自分が被爆者であることを忘れていたが、沈黙を続ける大地のなかに、年月をかけて心の奥に沈めてきた逃げた日の光景を、みていたのだろう。決定的な日の私を。

「グラランド・ゼロ」へ歩いていく一人の老人の後姿が、私の目に映つた。集団から離れて、老人は杖をついて歩いている。七十二、三歳だろうか。上背のある、骨組みがしっかりした体格である。退役した傷痍^{しやうい}軍人のように思える。目が悪い様子で、黒いレンズの眼鏡をかけている。連れ添っている者はいない。体の自由が利くうちに「グラランド・ゼロ」を訪ねたい、とバスツアーに参加したのだろう。憂いがある老人の姿に、私は惹かれた。どんな半生を生きてきたのか。わざわざ「トリニティ・サイト」まで訪ねてくるぐらいだから、ミュージアムの老人や月子の夫のように、第二次世界大戦を戦つた男なのだろう。

杖の先で「トリニティ・サイト」を探りながら歩いていた老人が、石碑を取り巻く人垣の外で、足を止めた。杖の頭に両手を重ねておいて、遠くから石碑を眺めている。

迷彩服を着た三、四人の少年が、老人の横を駆け抜けていく。赤いfrisbeeを空に投げ上げて、一人遊びをしている少年もいる。

前日まで空軍基地内の、アトミック・ミュージアムにあったファットマン^{*}が、夜を徹して運ばれて、フェンスの内に展示してあつた。爆発実験に使われたブルトニウム爆弾と同型の、兄弟分である。年に二回の里帰りなのだ。

月子と私は、いつか手をつないで歩いていた。日本の野山でみかける、ほけの花によく似た五弁の花が、草のなかに二つ三

つ咲いている。黄色い、艶のある花も咲いている。月子と私はしゃがんで、地に平みついて咲く花を眺めた。カナ生きているかしら、と月子がぼつ、といった。だいじょうぶよ、と私はいった。

月子と私は、爆発実験でできたクレータ⁴⁾をのぞいてから、出口に向かった。出口、すなわち入口でもある辺りに、人だかりがしている。入るときには気が付かなかったが、木のテーブルが出されて、テーブルの上に、爆発実験のときに使われた計器類の破片と、目覚し時計、部品の鉄片が並べてある。女性係官が目覚し時計に、ガイガー計数管を当てた。針が大きくぶれて、計数管が鳴り出した。

雨の日の、実験に使われた計器類である。まだ放射能が残留している、といって、針をさして説明する。音が強くなり、弱くなつて波を打つ。アメリカ人たちは首をふつて、おお、と半世紀むかしの威力に感動し、月子も私も、凄¹⁾いね、と首をふつた。係官は、どうだ、という表情である。私は感動して見入っている自分や、テーブルを囲む人びとが滑稽になり、自分の体に、ガイガー計数管を当ててみせなくなつた。ガアガア鳴り出したら、みんな驚くだろうな、と。

地上に放射された放射能の残留年月は、物質にもよるが、半永久的といわれている。フランスに住む知人の話によると、キュリー夫人の研究室に入ると、いまでも計数管が鳴り出すそうである。

(林京子「トリニティからトリニティへ」による)

*月子——カナの幼なじみでテキサス州在住。カナの紹介で「私」と知り合う。戦争中は疎開していたので被爆はしていない。

*ファットマン——一九四五年八月九日、長崎に投下されたものと同型の原子爆弾。

*カナ——「女学校時代」の「私」の同学年生。「私」とカナは二人とも勤労動員中に被爆している。近年は消息が途絶えている。

*ガイガー計数管——放射線量を測定する機器。

問一 傍線部①について、「私」が「生きているものがたてる物音」を「聞きたかった」のはなぜだと思われるか、説明しなさい。

問二 傍線部②において、「無音の波」という表現にはどのような効果があるのか説明しなさい。

問三 傍線部③について、なぜ「私」は「八月九日に流さなかった涙」を「人としてはじめて流したのかもしれない」と思ったのか、その理由を説明しなさい。

問四 傍線部④について、なぜ「私」は「感動して見入っている自分や、テーブルを囲む人びとが滑稽にな」ったのか、その理由を説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歌を詠むこと、心のおこる所なり。さらさら人の教へによらず。されば父堪能なりといへども、子かならずしもその心をつがず。師匠風骨あれども、弟子その体^{てい}をうつす事なし。

昔、齊桓公^{せいこんこう}が文を読むを聞きて、車つくり問ひていはく、「これは何事にか侍るらん」。桓公、「これは文とていにしへの人つくりおきたるものなり」。車つくりいはく、「さては詮なきものにこそ侍るなれ。その詞^{ことば}ありといふとも、さらにその人の心あらはれがたし。ただ、古人の糟粕^{そうはく}なり。われ車をつくるに、種々の故実おほし。その様みなうかべたれども、人に教ふる詞なし。我七十になるといへども、いまだ子にこれをつたへず。文もその定めにこそ侍るらめ」といへり。

歌もまたこれにおなじ。心にはよきやうもわるきやうもしれる輩^{たぐひ}も、人に教ふるちからなし。されば歌を心うることは詠むよりは大事なり。その深き心をしらずして、ふかき心を詠まむことかたかるべしといへども、一様になひていひおほせつれば、おのづからよきこともあれども、おほよその歌ことごとくかなはず。

堪能の人、たびごとに秀逸にあらず。さしもなき歌人もよき歌は詠めども、すべての歌の様さらにおなじものにあらず、かはりたるなり。歌を見しり心えたること、この道の至極なり。たとへば、管絃^{くわんげん}は堪能と耳きくこととは各別^{おのづか}なるなり。歌もよくは詠めども、心をしらぬ人おほし。その様管絃の耳にかはる所なし。人管絃をせん時、この道に長せん人教へていはく、「この笛の音はしらみたるなり。この箏^{そう}、琵琶の結はゆるびたるぞ」と教ふとも、その座にてはおのづからげにときくことありとも、座かはりてまた次の日など、なほ聞きしるべきにあらず。管絃に長せん人は、箏・笛のさがりあがり、いささかのたがひもあきらかにきくべし。すこし管絃をまなばむ人は不覺なりと云ふとも、いづれの結いづれの穴ときかずとも、なべて物の音^{おと}のたがひたるやらむとはきくべし。樂などのあらずなりゆかんは、きこゆべきことなり。又つやつや管絃のゆきがたしらがらむ人は、さほどだにもきくべからず。

歌もまたおなじ。道に長せん人はあきらかに見るべし。すこしこれをしらむは、さすがによしあし心にはおほゆべし。つや

つや歌のゆきがたしらざるむ人は、なにとも聞くべからず。ただし、歌はいかなるものも心うつるべしとなれば、我が心によしな
どおもふことはありもやすらめども、それはただしらするにおなじ。これを心えてしらすむとおもはば、この道をふかくすべ
し。

歌はただ詮する所ふるき詞によりて、その心をつくるべし。いはばよき詞もなし、わるき詞もなし。ただつづけがらに善悪
はあるなり。

(d) 万葉集にあればとて、「よしおやし」「はしけやし」などいひ、古今によめばとて、「さるぞめでたき」「わびしらに」などい
へる詞よむべきにあらず。かのたぐひこれにかぎりずおほし。

〔八雲御抄〕による

*齊桓公——中国、春秋時代の斉の君主。

*糟粕——残りかす。

問一 傍線部(a)はどのようなことをいっているのか、桓公と車つくりとの会話を踏まえて、説明しなさい。

問二 傍線部(b)はどのようなことをいっているのか、「管絃」について述べられたことを踏まえて、わかりやすく説明しな
さい。その際、「心」の意味するところを明確にすること。

問三 傍線部(c)を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(d)のように主張するのはなぜか、本文全体の趣旨を踏まえて、理由を説明しなさい。

IV

次にあげる文章甲は孔子が晋國の趙簡子(趙鞅)から招かれたときのエピソード、乙は君子たる者のあるべき姿について孔子自身が述べた言葉です。甲・乙ふたつの文章を読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

甲

趙簡子聘孔子。孔子將往。未至、聞趙殺其賢大夫竇鳴犢、喟

然而嘆之曰、「夫趙之所以治者、鳴犢之力也。殺鳴犢而聘余。

丘聞之、夫竭沢而漁、則蛟龍不処其淵。覆巢破卵、則鳳凰

不翔其邑。鳥獸尚惡傷類、而況君子乎。遂回车而還。

(蔡邕『琴操』により、一部改変)

乙

危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧

且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。

(『論語』による)

*竇鳴犢——春秋時代、晋国の賢大夫（重臣）。趙鞅に仕えた。

*喟然——ため息をつくさま。

*丘聞之——「丘は孔子の名。」「之」は以下に述べることがらを指す。

*竭沢——川や湖を干上がらせる。

*危邦——混乱していて危険な國。次句の「乱邦」も同様の意味。

問一 傍線部(a)「将往」、(b)「所以治」について、すべてひらがなを用いて読み下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問二 傍線部(c)「鳥獸尚惡傷類、而況君子乎」を現代語訳しなさい。

問三 傍線部(d)「天下有道則見、無道則隱」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(e)「邦無道、富且貴焉、恥也」はどのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 甲の文章には、孔子が趙簡子の招ぎに応じなかったことが述べられています。なぜ、孔子は応じなかったのか、この文章の趣旨を踏まえてわかりやすく説明しなさい。